

## 第七章 島へ

### 1

誰かが荒げてた声を張り上げている。

“なんでアンタなんかが、こんなところにおんねん！”  
聞いたことのない声だった。別の誰かに向けて激しく  
言い募っている。

目を覚ました萌黄は、額に置かれた濡れタオルを取ると、半身を起こして自分のいる場所を確認した。

部屋には見覚えがあった。記憶とは左右逆だが、間違いなくむんの家だ。彼女は富雄駅から徒歩三分のアパートの二階に、家族を亡くした直後からひとりで住んでいる。部屋はダイニングの他に、四畳半と六畳の部屋があり、萌黄が今いるのは六畳の寝室兼勉強部屋だ。

“俺は留守番を頼まれてるだけです”

“ウソつけ。言い訳にもならんことを”

言い争いは続いている。萌黄はベッドの枕元にある卓上時計を見た。九時十分を指している。

萌黄は思い出した。モデルハウスから出ようとした辺りから身体が火照り出し、車の中で倒れてしまったのだ。

きつとむんが自分の家で寝かせようと主張してくれたの  
だろう。重ね重ね、また迷惑をかけてしまった。

ベランダに面した遮光カーテンの隙間から、のどかな  
太陽の陽射しが畳の上に落ちている。あんなに熱かった  
身体も今はすっかり元通りだ。

萌黄はベッドを下りるとカーテンを開き、鏡台で髪を  
整え、ダイニングとの境にある引き戸をそうっと開けた。  
諍<sup>いさか</sup>いの声が続いている。玄関からだ。

「とにかくオレはここを動かないからな」

「どうぞご勝手に。おっつけ、舞風さんも帰ってくるで  
しょう」

後の発言は揣摩で、憤る相手に対してできるだけ冷静  
に対処しようと自分を抑えている。どうやらむんはいな  
いらしい。

「……萌黄さん、もう起きて大丈夫なのですか」

ダイニングの椅子に座っていた伊里江が萌黄に気づき、  
腰を浮かせた。

「うん、平気」

「……それは良かったですね」

伊里江はホッとして椅子に腰を落とした。

「やあ萌黄さん、どう？」

揣摩がスリッパをペタペタ鳴らしながらダイニングに  
戻ってきた。

「おかげさまで。……どなたかお客さんですか」

「ああ」揣摩は顔をしかめて肩越しに玄関をにらんだ。

「舞風さんのボーイフレンドらしい。いきなり訪ねてきて怒鳴り出すんだから始末に負えない。まあ俺たちもここに理由を明かせない弱みがあるし」

「ボーイフレンド……」

「合鍵まで持つてるんだからたぶんそうだろう」

萌黄は激しいショックを受けた。むんに彼氏がいるなんていう話は一度も聞いたことがない。そんなそぶりも見たことはなかった。ましてや合鍵を渡すほど仲のいい男性がいたなんて。

ダイニング入口の可愛い暖簾の間から、玄関の上がりがまちに腕組みをして座っている恰幅のいい男性の背中が見えた。

「コーヒーをいれるよ」

揣摩がしかめっ面を無理に解くように引きつった笑顔を浮かべると、キッチンの上からコーヒーポットを取り上げ、カップに注ぎ込んだ。

「どうぞ」

天下無敵の超人気アイドルが給仕してくれている。ふだんなら卒倒モノだが、今はそれどころではない。むんはどこにいったの？

萌黄の不審を察したのか、揣摩も横に腰掛けると、

「話しておくよ。舞風さんは君が倒れるとすぐここに連れてくることを提言した。幸い追っ手の姿はなかったしね。君をここに連れ込むと俺はすぐ柳瀬に車を始末するよう指示した。どこか目立たないところに乗り捨ててくれるようにと。あの車からアシがつくことを恐れたんだ。」

舞風さんにはレンタカーを借りに行ってもらった。俺や柳瀬は身元の痕跡を残すとマズいし、エリーは免許を持つてないからね。でもレンタカーのオフィスは隣り駅の東生駒とやらにあるらしく、電車に乗って行っただよ」  
揣摩はテーブルの上の液晶時計に目を走らせた。

「そろそろ戻ってくる頃だとは思うけど」

それっきり会話は途切れ、沈黙が家の中を支配した。窓の外では駆けていく子供の声がする。お母さんがたが集まって何ごとか早口で話し合っている。

むんの家にはテレビがない。新聞も取っていないから世の中の出来事が判らない。携帯電話でネット接続すればニュースに目を通すことはできるが、敵にここを知られる恐れがある。キングギドラはそう言った。

昨夜出た戒厳令とはどんなものなのか。世の人々はどう受け止めたのか。気になるところだ。

目の前にいる揣摩が青い顔を傾けてフウツとため息をついた。チラツと見た彼の顔には数カ所の傷があった。小さな火傷の痕もある。萌黄はあらためて今朝の脱出劇

の凄まじさを思い出し、全身に鳥肌の立つ思いがした。  
「ついさっきのことだけど」揣摩が沈黙を破って、ぼそりとしやべり出した。「信州にいる友人に電話をかけたんだ。そしたらこう言うんだよ。——自分を取り巻く世界が、鏡の国みたいに裏返ったって」

## 2

「……本当ですか」

すかさず反応したのは伊里江だった。

「ウソなもんか。冗談でそんなことを口にする相手じゃないからな」

「女性——のかた？」

萌芽は思わず訊ねた。揣摩は視線をわずかに揺らすと、妙な間まを置いてから頷いた。

「ミュージシャンなんだ。軽井沢を拠点にしてる人でね。伯父さんとやらが来たから大丈夫とは言ってたけど」

「……心配ですね」と伊里江。

「ああ、敵方にその通話を傍受されたら、彼女も標的にされる恐れがある」

揣摩は不安げな顔をうつむけ、握り拳に力を込めた。

（揣摩さん、その女性のことか心配でたまらへんのやわ。恋人かどうかは知らないけど、きっと好きなんやな）

萌黄は自分の前に置かれたカップに目を落とした。見  
つめていると、その中に吸い込まれ、溶けていくような  
気がした。注がれた湯に何もかも濾し出されたコーヒー  
粉のように。

突然現れた親友のカレシ。憧れの人のカノジョ的存在。  
萌黄は両手を合わせて顔をもたせかけた。

——別にいいじゃない。むんにカレシがいようがいま  
いが。自分とむんとの友情には何の関係もない。だいい  
ち、むんほど綺麗で魅力的な女性にカレシのひとりやふ  
たり、いても不思議はない。いて当然だ。

(でも、わたしは知らなかった)

カップから立ちのぼる湯気を萌黄はじっと見ていた。  
伊里江は萌黄の心中も知らず、相変わらず妙なイント  
ネーションで感心している。

「……驚くほどの偶然ですね。揣摩さんはこの広い日本  
で、三人のリアルと接触したんですよ」

「別に俺のせいじゃない。お前は自分から接触してきた  
わけだしな」

その時、「お待たせですー」と扉を開けて柳瀬が帰っ  
てきた。いきなりむくれた顔の男性が出迎えたので度肝  
を抜かれたようだ。挨拶しても反応がないのに首を傾げ  
ながらも、ペタペタとダイニングに入ってきた。

「遅くなりました。朝ご飯ですよー」



ビニール袋を逆さにして、テーブルに山のようなサンドイッチを広げる。

「ちよつと買い過ぎじゃないのか」

「ノー・プロブレム。残ったら私がいただくから。ところで舞風さんはまだ？」

「そろそろだろう」

柳瀬は確かに小太りだが、かいがいしく動いて三人にそれぞれサンドイッチとドリンクを配ってまわる。

「玄関におられるかたには？」

「いらんいらん」

揣摩がそう言った時、

「ただいま」

むんが扉を開けて入ってきた。

「むん！」

男ははじめかれたようにスクツと立ち上がった。

「耕平……なんでこんな時間に」

「君がもう一週間も連絡くれへんからや！」

男はダイニングにいる萌黄が耳を塞いでも聞こえるほどの大声で答えた。

「ゴメン、でも今は耕平と話してる時間ないねん」

そう言って靴を脱ぎ、中に入ろうとするむんの腕を男は荒々しくつかんだ。

「それはないやろ。昨夜も終電までアパートの前で待つ

とったんやで」

「急にそない言われても困るわ。私もいろいろと忙しかったんやから」

「そんな言い草ないやろ！ 戒厳令みたいなんが出たから、お前のこと心配しとったんやで」

ダイニングの四人は硬直したまま耳だけを大皿のように広げ、事の成り行きを静かに見守っていた。

「とにかく今は時間がないから」

「ないからどないやっちゅーねん」

「離してよ。痛い」

男はしぶしぶむんから手を離れた。むんは視線を床に落としながら髪をかきあげると、

「もう終わりにしましょう」

「……………」

「前にも言うたけど、これ以上続けるのは無理よ」

「…………本気なんやな」

「…………ごめん」

カタン。男は合鍵を下駄箱の上に置いた。そして無言で扉を開けると表へと出た。身体が震えている。

「元気でな」

振り向かずにそう言い残すと扉は閉じられた。カンカンと階段を降りていく音が遠ざかっていく。

しーんと静まり返る室内。



ややあつてむんは歩き出し、暖簾を分けてダイニングに入ってきた。そして深々と頭を下げると謝罪の言葉を口にした。

「どーも、お見苦しいところをお見せしましたあ！」

それを機に室内の緊張は解け、誰も何もなかったような顔で「おかえり」とむんを迎え入れた。むんは丈の短いベージュのカットパンツと濃いグリーンのプリントTシャツに着替えていた。

「いい車はあつた？」すかさず揣摩が訊ねる。

「えーっと、揣摩さんのご希望どおり、ありふれたワンボックスにしましたので」

むんは笑顔で答えた。萌黄は複雑な思いが胸につかえたままだったが、ひとまずホッとすることにした。

しかしなごんだ雰囲気吹き飛ばすように、伊里江が叫び声を上げた。

「……静かに！」

彼はシートと口の前に指を立てると、

「……誰か外で叫んでいます」

そう言つて皆の注意を喚起した。

### 3

一同は凍り付いたように動きを止めた。柳瀬などはサ

ンドイッチにかぶりつく直前で口を開いたままフリーズしている。

彼らのそばだてた耳は、男性のわめき声を捉えた。

「アパートの下からや」

つぶやいたむんが最初に動いた。彼女は摺り足で玄関に向かうと靴も履かずに三和土<sup>たたき</sup>に降り立った。揣摩と伊里江も続く。萌黄もツバを飲み込んでから後を追った。

扉を背にしたむんは音を立てずに錠を外し、背中で押しやりながら細めに扉を開いた。

わめき散らす声は階段を下りた辺りから聞こえてくる。

『——他人<sup>ひと</sup>家の郵便受け覗いて、泥棒かあんたらは！  
なんやねん、その軍隊みたいな迷彩服！』

（迷彩服!!）

全員に緊張が走った。

「あの声はさっきの？」 揣摩が小声で訊ねる。

「耕平さんや」

それにしても大きな声だ。ご近所にまる聞こえだろう。

『——そやから二〇三号室の舞風さんは留守やて言うてるやないか。俺も用事があつて寄つたんやけどおれへんかってん。もう大学に行つたんちゃうか』

むんはハツとした。

「あの人、わたしに伝えようとしてるんやわ！」

「そうか、こつちに聞こえるよう、わざと大声を張り上

げてるんだな」

揣摩は長身を活かして扉の上方から階段を見おろした。身体を張って通せんぼしている耕平が対峙している相手は――

「奴らだ！ もう嗅ぎ付けやがった！」

そう言つて、ドアノブを引いて扉を閉じさせた。

「舞風さん、どこか逃げ道はないか」

「ある。奥のベランダから降りれば、裏のアパートとの間が狭い路地で、なんとか人ひとり通れる」

「よし、みんな、靴を持ってついてこい！」

「履いていってええから」 むんが言つた。

揣摩たちは靴を履くと、廊下を取って返した。萌黄は土足のまま、むんの寝室に入り、リュックをつかんだ。

「柳瀬、ホラ、靴だ」 ひよいと渡すと「お前の横幅は、裏道を通れるかなあ」

ベランダに出て下を見おろした伊里江は、

「……こつちに奴らはいません」

「よし、俺から行こう」

揣摩はひらりとベランダを越えると、いろんな出っ張りをつかみながら、スルスルと身軽に降りていった。

萌黄もダイニングから出ようとして、親友の姿がないことに気がついた。

「あれ、むんはどこ？」

振り向くとむんはまだ玄関にいて、扉の隙間から階下のやりとりをうかがっている。

「むん、むん！」

萌黄はリュックを背負い直すと、飛ぶように玄関に取って返した。その時。

ポウッ。

奇妙な発砲音が萌黄の耳たぶを叩いた。同時にむんの横顔が強ばった。

「こ、耕平さ——！」

目を見開き、我を忘れて飛び出そうとするむんの手を、萌黄はすんでのところでつかみ止めた。

「アカンよ、出てったら殺される！」

「でも、でも、耕平さんが！」

「むん！」萌黄は目を閉じたままブルブルと頭を振った。

「逃げるのが先や！」

カン、カン、カン。

階段を昇ってくる足音。

萌黄はむんに両腕を回して、強引に中へと引きずり込んだ。そして身体を入れ替え、震える手で素早く錠を下ろした。心臓が破裂するかと思うほど、激しく胸を打ち鳴らしている。

「むん、立って！」

それでも動かない親友を、萌黄は渾身の力で引きずり

ながら部屋の奥へと連れて行った。

ドンドンドンッ。扉が叩かれる。

「ひっ」

萌黄は生きた心地がなかった。汗が全身からドツと噴き出す。彼女はむんの腕をつかんだまま、ベランダから身を乗り出した。

「た、高い——」

見おろした地上ははるか遠くにあつた。今さらながら高いところの苦手な性分が彼女の足をすくませる。

ドンドンドンッ。乱暴なノックは続いている。突破されるのも時間の問題だ。

先に路地に降りた男たちが「早く早く！」と急かしている。

（アカン、わたしには無理。足が震えて力が入らへん）  
萌黄は敷かれたタイルの上にへたりこんだ。むんもベランダを囲むフェンスを背にストンと尻餅をついた。

「……………」

萌黄の耳にむんのつぶやきが聞こえた。顔を上げた時、むんの目から大粒の涙がこぼれ落ちるのが見えた。

「耕平さんが——撃たれたよ——」

萌黄は絶句した。むんのカレシが――。

「わたし見たんや。撃たれるとこ」

むんは力なくそう言うのと、両手をタイルの上に落とし、落とした。

萌黄はあわててむんに近寄り、

「軽い怪我かもしれへん。それより――」

「頭を撃たれて生きてるわけないでしょう！」

むんは吐き捨てるように言い、両手で顔を覆うと、激しく泣き出した。

萌黄はどうすればいいのか判らなかった。こんなに取り乱したむんはかつて見たことがない。慰めようにもやったことがないだけに、言葉が上手く出てこない。

「むん、むん」萌黄は親友の肩を揺すった。「耕平さんは生きてるよ、向こうの世界で生きてはるよ」

エツという顔でむんは顔を上げた。

「生きてる……？」

「そうや、リアルの彼は死んでないよ」

「でも……わたしは二度と会われへん。そうやろ？」  
むんは顔を歪めて萌黄に問いかけた。

「わたしかて」萌黄はうつむいた。「わたしかてお母さん亡くしたもん」

ダウンッ、ダウンッ。

今度の音はノックではなかった。扉に銃弾が撃ち込ま

れたのだ。

萌黄は無理矢理むんの脇に首を突っ込むと、自分より頭ひとつ大きな友人を持ち上げようと力を入れた。むんもなんとか立ち上がろうと膝を立てる。しかし腰が抜けたのか思うにまかせない。

救世主はそのとき現れた。

「待ちきれないぞ」

「揣摩さん！」

戻ってきた揣摩は軽々とむんを立たせ、機敏に背負い上げると、

「ついてこれるな？」

と萌黄を促した。彼女はウンと頷き、揣摩の後からフェンスを越えた。

玄関のドアが開き、どやどやと迷彩服たちが侵入してきた。だがその時には揣摩も萌黄も地面に着地していた。

「舞風さん、レンタカーはどこだ」

揣摩が走りながら早口で訊ねる。彼の背中に担がれたむんは、焦点の合わない目を開き、

「このまま行つて……。裏のアパートをぐるっと回るとコンビニがある……。その駐車場に――」

「判った」

揣摩と萌黄は路地を左に折れた。これでどうにか死角に入る事ができた。萌黄はむんの背中で揺れるリュツ



クだけを見つめ、必死に揣摩の後を追いかけた。

コンビニは路地を抜けた目と鼻の先にあった。柳瀬と伊里江も駐車場の入口で待っていた。

「あれか。トヨタ・エスティマハイブリッド二〇一三年型八人乗り——。悪くない」

揣摩はむんの手からキーをもぎ取ると、素早くドアを開けた。

「みんな乗れ、柳瀬、運転頼む」

「ラジャー！」

キーを受け取った柳瀬は、威勢よく叫んで運転席に飛び込んだ。萌黄は後部ドアをスライドさせて乗り込み、中からむんの乗車を助けた。むんは依然力が入らない様子で、這うようにシートに昇った。伊里江が萌黄の隣りに座り、ドアを閉めた。

「よし、スタートOK！」

助手席の揣摩が号令をかけた。すでにエンジンを始動させていた柳瀬がアクセルを踏む。エスティマは静かにコンビニの駐車場を出た。ベンツに比べて車高がかなり高い。萌黄はバスに乗っている気分がした。

「あっ」柳瀬が片手で口を押さえる。

「どうした」

「この道だとアパートの前を通過することになるわよ。Uターンもできないし、どうしましょう」

「うーん、しかたがない」揣摩は後ろを向いて「頭をで  
きるだけ低くするんだ」

セカンドシートの伊里江と萌黄は尻を前にずらして丸  
くなった。

エステイマは狭い道路を徐行運転で進んでいく。

「どうだ、奴らはまだいるか？」

揣摩も丸くなって柳瀬を見上げる。

「い……るわね、いるいる。階段にふたり、部屋の前に  
ふたりほど」

執拗な迷彩服の襲撃。萌黄はリュックをぎゅつと抱い  
たままシートに深々と顔を埋めた。

（何ごともありませんように……）

ひたすら祈るしかなく術がなかった。そんな彼女の頭  
上に、ふいにむんの身体がのしかかってきた。

「むん、どうしたの」

萌黄の問いかけにむんは答えず、さらに体重をかけて  
くる。

「重いよお」

「……むんさん、どうしました？」

伊里江も問いかけるが返事はない。

萌黄が親友の下からすり抜けると、むんは窓に額を付  
けて外を見ていた。

「あぶないよ。見つかってしまう！」

「あああ」むんの口から言葉にならない声が漏れた。  
彼女のさす指につられて萌黄は見た。通過しようとするアパートの階段にひっかかったTシャツと綿のパンツを。それらが耕平の着衣であることは間違いなかった。

5

たわわに実った稲穂が朝の風にそよいでいる。その中をエスティマがシルバーメタリックのボディを煌めかせながら巡航速度で駆け抜けていく。

「これからどちらへ？」

運転手の柳瀬が質問した。車内は単調な走行音だけがBGMのように流れていた。

「さあ、どこへ行こうか」

ようやく揣摩が口を開いたのは、田舎道の信号を三つも過ぎてからだった。

「どこか安全な場所はないかなあ。萌黄さん、いいところがあったら教えてよ」

「はあ……」

そんな都合のいい場所があったら、とつくに提案している。いくら地元民だからって、わたしは引きこもり予備軍だったんだから、と萌黄は心の中で文句を並べ立てた。

「俺ってさあ」揣摩が両手を頭の後ろに回して続ける。

「十五歳からずっとアイドルだったから、君たちに比べれば遥かに外の世界を知らないんだ。コンサートツアーやロケで日本中をまわってるじゃないかって？ とんでもない。八年前に大きなスキャンダルに見舞われてから会社の方針が厳しくなってね。四六時中ガイドという名の見張りがつくようになった。マネージャーとは別に」

車は信号で停止した。交差点だが横切る車の姿はない。対向車さえ、さきほどからほとんど出会わない。

「自分で言うのも何だが、俺の場合、模範的な私生活が認められてガイド抜きになった。今は柳瀬だけだ。それも二年前にようやくね。だから――」

信号が青に変わり、エステイマは再び走り出した。

「だから一人旅なんていまだに経験ないんだ。憧れはあるけど怖いという気持ちもある。今みたいに知らない場所を目的地もなしに走るのもあまりいい気持ちはしない。できればどこでもいい、あそこに行ってくれと指示してほしいな」

（そんなこと言われても……）

萌黄はチラツと左右に目をやった。むんはずつと窓を向いたまま微動だにしない。伊里江は奈良の風景が珍しいらしく、キヨロキヨロと首を巡らせている。

「あのお」

柳瀬が片手を天井に向けて小さく上げた。

「なんだい？」揣摩が受ける。

「洲本の件は消えたのでしょいか」

その発言にピクツと反応したのは意外にも伊里江だった。

「……洲本とは淡路島の、ですか？」

「ああ、そうだ」

揣摩は手を頭からおろすと、思わせぶりに胸の前で組んだ。

「萌黄さんを連れてくるよう総理に指定された場所が、じつは洲本なんだ」

「エッ」萌黄は驚きのあまり、身体が浮いた。「モデルハウスで『東京に』って言ったのは」

「もちろんウソだよ」揣摩は振り向くと白い歯を見せた。

「敵にこちらの手の内を見せる必要はないからね」

「でも、あのとき話に出た矛盾点はどうなるの？」

「総理が俺に言ったのと、連中に下した命令の異なる点だな。それは俺にも謎だ。俺には命に代えても君を守れなんて言っときながらな」

揣摩はポケットから携帯を取り出した。そしてウランに、例のモノをもう一度見せるよう指示した。

《……唐突な依頼で誠に申し訳ないのだが——》

山寺総理から揣摩太郎宛に送られてきたムービーであ

る。萌黄は食い入るように覗き込んだ。

執務室らしき部屋で正面を向いた総理が静かな口調で話している。夜だろうか、後ろに見える窓は暗い。

「——ン????」

萌黄はさらに身を乗り出した。

「どうしたの？ 昨日見せたのと同じ映像だけど」

「ええ。でも」

つぶやいた次の瞬間、萌黄は揣摩のシートを叩いて叫んだ。

「止めて、映像を止めて！」

間違えて柳瀬がブレーキを踏んだ。後続車がなかったのが幸いだった。

「なんだよ急に」揣摩が咎めるように言う。

「いいから止めて、少し前に戻して」

「ウラン、二十秒前からもう一度再生してくれ」

映像は時間をさかのぼり、再び流れ出した。

「揣摩さん、この映像のサイズはいくつですか」

「普通の液晶サイズじゃないのかな。なあウラン」

《違わよ》

「違う？ じゃあいくつなんだい」

《んゝつとね、パソコンのXGAサイズよ》

「そんなにデカいのか。どうしてまたそんな無駄な」

揣摩は首をひねった。

「柳瀬さん」萌黄は運転席に話しかけた。「この車にテレビは付いてますか」

「はい、高精細デジタルテレビが標準装備ですよ」

すかさずボタンが押され、ダッシュボードから液晶テレビが現れた。パソコンの十七インチワイドスクリーンほどの大きさがある。

萌黄が頼むより先に、揣摩は携帯をダッシュボードのコネクタにはめ込んだ。

「再生するよ」

総理が拡大サイズで画面に現れた。確かに鮮明で粒の立った映像だ。

「マイったな。これほど高画質だったなんて」

「ほら、よく見て」

萌黄が指さした。

「——ありや、何だコレ！」

## 6

揣摩が驚倒したのも無理はない。指摘した萌黄でさえ、わけが判らず、困惑した。

仰天のシーンはこうだ。

山寺総理は執務室の大きな書斎机に軽くもたれながら、独特のもの柔らかな口調で、揣摩に対するメッセージを



流れるように語っていた。

問題の場面はこの直後。総理は話の継ぎ目に腰を浮かすと、画面左に向かってゆっくり歩き始めた。

ところがである。カメラに対して斜めを向いた総理に、奇妙な現象が起きた。

「総理の背中が綻<sup>ほころ</sup>びてる！」

漫然と見ていたのなら気づかないほど小さな綻びだった。しかしそれは単なる綻びではなかった。

「……CGですか」伊里江がつぶやいた。

「なんだと？」

揣摩はまさかという顔で萌黄を見た。

「そうみたいです」

萌黄は頷くと、柳瀬から受け取ったリモコンを操作して映像を巻き戻し、問題の箇所をコマ送りで見せた。

驚愕の波が再び彼らを襲った。

総理の上着の後ろ半分、その部分が布地にあり得ないギザギザの形状をなしていたのだ。まるで黒い厚紙を折って乱暴に作ったように。

「通常、CGで複雑な立体を描くには、表面形状を三角形の集合体で近似します。最終的には滑らかな曲面に見えるよう複雑な計算処理を施すんですが、テストの段階ではテクスチャも影も付かない、単純な多面体の状態で形状や動きのチェックを行います。もちろん本物の質感

を表現するには時間もコストもかかるわけですから、必要な部分は処理から除外したり、質の粗いまま放っておいたりします」

「つまり、君はこう言うのかい？」揣摩は考え考え質問した。「この総理の背中では手抜きCGだと」

「はい」

「向こう側だけ作り物なんておかしいじゃないか。——てことは、もしかすると」

揣摩はハツとして視線を画面に戻した。

「——総理そのものがCGなのか？」

「注意して良く見てください。背景の部屋もです」

「そんな！」

揣摩の受けた衝撃は小さくなかった。彼はまばたきを忘れて総理の静止画を長い間凝視していた。そして窓の外を見やり、天井を向き、最後にがっくりと両肩を落とした。

「俺は、でっち上げの映像に騙されていたのか」

「それは……しかたがないと思います。携帯の画面は小さいですし」

すかさず萌黄がフォローしたが、

「君は二度目で気づいた。やっぱりスゴいな。俺なんて確認のために何度も見たというのに。恥ずかしいよ」

揣摩は自嘲気味に肩をすくめた。

「そんな……慣れてるだけです」

萌黄は消え入るような声で謙遜したが、柳瀬まで賞賛の目を向け、小さな拍手を送った。彼女は耐えきれなくなり、話の矛先を変えた。

「で、でも変ですよ。動いたり話したりする総理をここまで精巧に作れるなら、背中もちゃんと作れたはずですよ。これじゃまるでワザと——」

萌黄は言葉を切った。問題の核心に気づいたのだ。

揣摩も同じだったらしい。

「ワザと——つまり、手抜きなんかじゃなく、意図的なものだと？」

「あるいは」

「するつてえと、どうなるんです？」柳瀬が話に割って入ってきた。どうやら昂奮すると江戸っ子の血が現れるらしい。「総理から直々に映像メールを受け取ったときは、なんで芸能人にそんなこと頼むのかわたて首を傾げたの。でも発信元アドレスが本人を証明する認証パターン付きだったから信用したわけ。その映像がまがい物だということは、誰かが総理になりすましてたつてことよね？——ふてえ野郎だ！」

業界人の言葉遣いと江戸弁が微妙に入り混じっている。「しかし、それなら筋が通る」揣摩は膝を打った。「迷彩服に萌黄さん襲撃を命じたのは本物の総理で、俺に萌

黄さんを無事に洲本まで連れてこいと指示したのは真つ赤な偽物なんだな。チクショー、人を担ぎやがつて！」

揣摩は憤懣やるかたないといった鼻息で、見えない相手を睨みつけた。

「でも変ねえ」柳瀬はさらに首をひねる。「総理を騙った偽物さんは、萌黄ちゃんがタロちゃんの大ファンだと知ってたんでしょ？ だからタロちゃんご指名で依頼が来たんだし。……いったいそれはどこで耳にしたんでしょうね、萌黄ちゃんのことを」

「萌黄さん、俺のファンクラブに入ってる？」

「……はい、一応」

「うーん」柳瀬の首はひねる角度をさらに深める。「ウチの個人情報保護対策はピカイチなんだけど」

「複雑な情報化時代に、完璧はないさ」

「でもねえ」

柳瀬は納得いかない様子だ。

揣摩は冷静さを取り戻すと、肩越しに萌黄を見た。

「ひょっとして君は、CGがチャチな理由についても意見があるんじゃないのかい」

「そ、そうですね——気を悪くされるかもしれませんが」

ど」

「心配はしないでいいさ」

揣摩は笑顔を浮かべて、優しく先を促した。

「つまり映像の送り主はですね、いずれ偽物だとバレることを見越して、ああしたんじゃないかと思うんです。相反する指令を下したどちらが偽物か、揣摩さんに気づかせるために」

「判らないな。それで相手にどんなメリットがあるんだろう」

萌黄は言いにくそうにモジモジした。

「……あくまで私の想像ですが……揣摩さんが次のアクションを起こしやすくするためじゃないかと」

「俺の？ ハハハ」

揣摩は笑ったが、萌黄は真剣なまなざしで続ける。

「仮に、揣摩さんに指示したのが本物の総理だったらどうしましたか？」

「そりゃ、俺や君をおびき寄せる罠だろうから、今となつては従つたりしないよ」

「偽物だったら？」

「手の込んだ映像を送りつけた相手は誰なのか、真意は何なのか、聞いてみたい気はするな」

「となると、唯一の手がかりは」

「なるほど、洲本にありつてことか」

揣摩はパンと手を叩いた。

「柳瀬、行き先が決まったぞ」

「淡路島に渡るのよね。ラジャーよ」

柳瀬はすぐさまカーナビを起動しようと手を伸ばした。

「ダメッ！ GPSを使<sup>つか</sup>ったらアカン！」

萌黄の声が柳瀬の手を止めた。

「そうだぞ柳瀬。連中はGPS衛星を手中にしてるんだから」

最近のカーナビは、GPSなしでは使えないのだ。

「じゃあ、次のコンビニで道路地図を買いましょか」

柳瀬は車の駐車灯を消し、静かに発進させた。

「ついで食料を買い込もう。朝のサンドイッチは食いつづけたからな」

揣摩が空腹そうに腹をさする。

「タロちゃん、サンドイッチはちゃんと持ってきたよ」

「ウソ、あの騒ぎの中で、いつ？」

「逃げる時に決まってるじゃない。あのね、命の次に大切なのは食べ物なんだからね。これ、戦争体験のある田舎のおばあちゃんの口癖だったんだよねえ」

萌黄は自分の後ろのサードシートを見た。確かにそこには、サンドイッチを詰めたコンビニ袋があった。

「お前は最強のマネージャーだよ」

車内が少なごんだ。萌黄はサンドイッチを皆に配つ



た。誰もが空腹だったので、受け取るや、今度は邪魔されるものかとばかり、急いで食べ始めた。

ひとり、むんを除いて。

彼女は萌黄の差し出したドリンクさえ「いらない」と受け取らず、顔も向けてはくれなかった。

探すコンビニはすぐ見つかった。柳瀬だけが車を降り、店に入った。店内の防犯ビデオに映ることを恐れたからだ。どこで追っ手の目に触れるとも限らない。

そのとき、前の道を、自衛隊の輸送車が轟音を響かせて駆け抜けていった。本物の自衛隊員がすし詰めのように乗車していた。

柳瀬はすぐに出てきた。お目当ての地図を抱えている。「なあ柳瀬、戒厳令のこと、何か小耳にはさんでないかい？」

「そうそう、それよそれ」

運転席に戻った柳瀬は、昨夜警察で聞いたことを話した。それによると、総理はテレビに緊急出演し、危険を伴う作業は極力控えるよう国民に訴えたという。各地で行われていた工事はすべて中止され、プロ野球などのスポーツも軒並み取りやめになった。

「総理の呼びかけは、それなりに効果があったらしいのよ。警察の調査でも、昨夜から今朝未明にかけての全国交通事故の数が、ものすごく少なかったんだって。」



ただ、海岸から不法に入国してくる連中がいるとの情報が入ったため、自衛隊が各地で展開することになったらしくて。だから戒厳令なのね。

人の身体が砂になる奇病は全国的に増えているみたい。ワクチンは二週間程度で完成するから、それまでは自重してなさいって繰り返し訴えてたのよね」

揣摩は苦笑せざるを得なかった。

「二週間後か。その頃には、この世界は煙のように消え、総理のウソを糾弾する人間はどこにもいやしないさ」

その通りだ。北海道が消えたのと同じことが、宇宙規模で起きるのだ。鏡像宇宙が誕生して今日で三日目。あと、まる十二日しかない。

柳瀬は淡路島に渡る経路を確認すると、自ら元氣よく出発の号令をかけ、エスティマを国道に乗せた。

「……あの、揣摩さん」

「何でしょう、エリーさん」

揣摩は皮肉っぽい声で応えた。

「……お訊ねしたいのですが、目的地は洲本のどこなんでしょうか」

「うーん、痛いところを突かれたな。じつは、ニセ総理の奴、『行けば判る』としか言わなかったんだ」

「……そうですか」

「気になることでもあるのか」

「……私が兄と長年暮らしていた島は、洲本のそばなのですよ」

8

伊里江が投じた一石は、新たな緊張の種となって皆を驚かせた。とりわけ揣摩太郎は大いに憤慨し、萌黄が心配するほど激しく膝を叩いて怒りを表した。

「なんでそんな大事なことを今まで黙ってたんだ！」

揣摩はツバを飛ばしてなじったが、

「……誰も質問しなかったからです」

と伊里江は少しも悪びれない。

さらに「お前がここにいること自体、おかしい」と揣摩が怒鳴れば「降りますから止めてください」と伊里江は感情を交えずに平然と答える。

萌黄はため息をついた。ふたりは基本的に肌が合わないのだ。長年、人気グループのリーダーとして個性的なメンバーをまとめてきた揣摩としては、協調性の感じられない伊里江に我慢がならないのだ。

「そうは行かねえよ。お前は兄貴を見つけるための情報源であり人質でもあるんだからな」

「……私は役に立つ情報など持っていません。それに、兄は私の命など眼中にありません」

「そもそもリアルを退治しに出張<sup>で</sup>ってきたんだろうが。本音は迷彩服を着て敵側に入隊したいんじゃないのか？俺たちの居場所を手土産にな」

「……申し上げた通り、私は既にリアル抹殺計画を放棄していますし、手段を選ばない敵側のやり方には反撥を感じています」

揣摩の口調は徐々に激しさを増し、感情的な口論に発展していった。

「お前のもったいぶった話し方にはイラつくんだよ。いちいち“……”みたいに間<sup>ま</sup>を取るな！」

「……ナビの役割をちゃんと果たしてください。地図を広げながら運転する柳瀬さんが気の毒です」

「何だと！」

シートの前後で取っ組み合いを始めかねない剣幕だ。萌黄は仕方なく「ストップ、ストップ」と仲裁に出た。もつとも興奮しているのは揣摩だけだった。

萌黄は伊里江を自分のほうに向かせると、

「エリーさんの住んでた島は、洲本からどれぐらい離れてるの？」

と話の流れを戻した。

「……漁船で三十分ほです」

頷くと今度は揣摩のほうを向き、

「もしかしたら、ニセ総理はわたしたちをエリーさんの

島に誘導してるのかも。そんな気がしませんか？」

「判んないよ、そんなこと」彼は吐き捨てるように言っていたが、さすがに恥じたらしく、声を落として「まあ可能性はないとは言えないな」

そして居住まいと正すと、車内に向かって宣言した。

「他に具体的な行き先も出てこないしな。こうなったらエリーの家庭訪問でもやるか」

萌黄はほっと胸をなで下ろした。とりあえずこの場をしのぐことができた。同時に目的地をはっきり決めることができたのだ。

「そこに何があるうと、どんな恐ろしい罠が待ち構えていようと、我々は進まねばならない。虎穴に入らずんば虎児を得ずだ。柳瀬隊員、頼んだぞ」

柳瀬はラジャーと応答し、揣摩の差し出した手に地図を渡した。

「淡路島へは、明石から渡るのが一番いいようです、隊長」

エステイマは、ぐんぐんと昇っていく太陽のように、西へ向けて速度を上げた。

道中は、高速道路をできるだけ避け、一般道をひたすら進んだ。時間はかかったが、安全が何よりも最優先だった。

トイレ休憩には、人混みの多い百貨店や大型スーパーなどを選んだ（それでも人出は明らかに少なかった）。彼らは途中で購入した帽子を目深にかぶって、交替で用を足した。

大阪市内に入った時、あちこちで自衛隊の車輛を目撃した。検問には出会わなかったが、一般車の走行量は地方以上に少なかった。彼らは慎重を期して、できるだけ裏道を選んだ。そのため大阪市内を抜けた時には、午後一時をまわっていた。

昼食調達係を仰せつかった萌黄は、揣摩に借りた帽子をかぶって車を降りた。西宮市内のスーパーだった。

周囲に注意しながら入口に近づく。買い物客はそれなりにいた。意識的にうつむきながら自動ドアをくぐる。その彼女を後ろからむんが追いかけてきた。やはり帽子をかぶった上にサングラスをかけている。

「わたしも付き合うわ」

ふたりはいっしょに食品売り場をまわった。パックの寿司や菓子パンなどを買う物かごに入れていく。

「柳瀬さんには栄養ドリンクと目覚ましガムも買っているか」

萌黄は提案し、ふたりはお菓子売り場へと進んだ。

「ごめんな」

むんがぼつりと言った。

「あ……」

萌黄はむんを見上げた。サングラスの奥の表情は読み取れなかった。

「萌黄のぼうがずっと大変やったのに、心配かけてしもたね」

「ううん」

萌黄は首を振った。

「いつもの元気なむんに戻るから」

「うん。でも無理せんでええよ」

「ありがとう」

むんは萌黄の手を取ると、強く握った。

9

萌黄は握られた手を強く握り返した。むんはホツとしたように肩の力を抜いた。萌黄はむんの手を離さなかった。離せばむんがどこか遠くに流れて行ってしまいそうな気がした。

「驚いたやろね。わたしに男友達がいたこと」

「少し」

「耕平さんも北海道事件の遺族やったんよ。いっしょに活動してるうちに打ち解けていろいろ話すようになった」

ね。熱心な活動家やったけど、結論を急ぎ過ぎる人やった。……あの人ね、会ってから五日目に、わたしにポーズしたんよ」

「ほえ？」

萌黄は商品棚に足を引っかけ、前につんのめった。

ポーズ——!?!。

「だから、わたし……」

しかし、それきりむんは口をつぐんでしまった。

ふたりは通路の間を商品を眺めることもしないで、ただとぼとぼ歩いた。

「アカンね、ゆっくりしてたら揣摩さんらに叱られる」

むんはサングラスを外すと、明るい口調で言った。

「急ごう。わたし、ドリンクを見てくるわ。萌黄はお菓子を見つくるってな」

微笑みを残して、むんは別コーナーに去った。

萌黄はお菓子コーナーへと歩を進めた。陳列された色とりどりのパッケージが彼女を待ち構えていた。新作チョコレートが萌黄を手招きしている。手に取ると金文字で書かれた“Bitter”の逆さ文字が、黒いラベルの上で怪しく光り輝いていた。

結婚という概念は自分には無縁なものと思っていた。

いや無縁かどうかも考えたことがなかった。まだ十九歳だったし、むんもそうだ。自分たちはまだ大学の一年生



なのだ。

でもむんは自分などより見た目も考え方もはるかに大人だ。自分と違って社交的だし話し上手だから、人前に出ても物怖じせず、考えをそつなく主張することができ。本人は嫌がっているが、北海道事件の遺族会の広告等的存在になり、テレビに映る機会も増えていた。芸能プロダクションからのオファーが後を絶たないのも当然だろう。

親友はスーパーマンなのだ。

スーパーマンが親友なのだ。

でも、ふたりきりでいるとそんな思いは頭の中から消えてしまう。むんは常にむんであり、共に笑い共に泣く、唯一気の置けない存在なのだ。

ただ、両親と弟を失って以来、むんの感情表現に若干の遅れを感じるようになった。彼女の返事に一瞬、ためが入るようになったのだ。まるで話そうとする言葉のひとつひとつを検査にかけているような。

むんは変わった。そう気づいた時は悲しかった。

北海道消失事件以後、我が国や近隣諸国が受けた政治的経済的影響ばかりが取り沙汰され、遺族の心のケアにスポットを当てたマスコミは少なかった。テレビでは連日、知床半島や富良野や美瑛や摩周湖などの映像が流さ

れ、我々はいかに貴重な財産を失ったかを繰り返し印象づけようとした。驚くことに、3Dホログラフィック技術を駆使して、ヴァーチャル北海道を海上に原寸で再現しようという計画まであるという。

遺族たちはそんな世間の風にいらだち、立ち上がった。会員数百万人に達しようかという遺族会は、まず人間を優先せよと、残された者の心のケアをと強く訴えた。

むんは遺族会の活動を優先するために大学を休学し、生活していくためにアルバイトに精出ようになった。母は「部屋はたくさんあるから、いっしょに住んだらどない？」と勧めたが、むんは丁重に辞退した。彼女は自立心を養いたと言った。

ふたりの境遇に開きができて、萌黄にとってむんは不動の親友だった。それは今日まで変わらない。

（けれど、むんにとってわたしは本当に親友やったんやろか）

自分はこれまで、むんには何ごとも包む隠さず話してきた。むんはいつも真剣に話し相手になってくれたし、熱心に相談に乗ってくれた。学校の先生のように「考え過ぎだ」と鼻で笑ったりはしなかった。

（でも、むんがわたしに深刻な相談を持ちかけてきたことは一遍もない。彼女はいつも、自分には問題など何もないという顔をしていた）

彼女にだって困り事や悩みはあったはずだ。ましてや人生を変えるほどの事件に遭遇して、その苦労は並大抵ではなかったはず。

彼女は自分の抱える問題を誰に相談したんだろう？ バイト先や遺族会など、彼女は相談相手に事欠かなかったに違いない。わざわざ自分に相談する必要などない。だいいち持ちかけられても自分はこれっぽっちも有益な助言を与えることはできなかっただろう。

（むんはわたしを親友と思ってくれてるんやろか？）

考えたくない疑問だ。でもひよつとしたら、自分はむんの大事な友達の中のひとりでしかないのかもしれない。あの耕平という男性——。きっと彼がむんにとって一番身近な相談相手だったのだ。一番大切な存在だったのだ。そして——恋人だったのだ。

できれば聞きたくなかった。むんにカレシが、恋人がいたなんて聞きたくはなかった。むんはいつたいどういうつもりで自分にプロポーズされたことなんて話したのだろうか。しかも唐突に。

いや、むんにカレシがいたっておかしくないとさっき思ったばかりじゃないか。でもそんな話は聞きたくなかった。——ああ、堂々巡りしてる。

耕平という人。チラッと見た限りではなかなかカッコいい男性だった。むんはどうして別れようとしたのだろ

う？ 喧嘩でもしたのだろうか。結論を急ぎ過ぎる彼に嫌気がさしたのだろうか。判らない。

もっと判らないのは……そんな相手の死に、むんはかつてない取り乱しかたをした。まるで肉親をなくしたような嘆きかたを見せた。

『そういうもんや』

突然、頭の中に思いがけない声が聞こえてきた。

——お父さん。

10

まぎれもなく萌黄の父親の声だった。

(どうしてお父さんが……)

困惑する萌黄の頭の中で灰色の霧が渦巻くと、それは徐々に父親の姿をとり始めた。父親はあやふやな輪郭を伴って現れ、あやふやな笑顔を萌黄に向けた。

『そういうもんや、萌黄』

父親は再び声を発した。しかし父親の唇は閉じられたままだった。閉じたまま笑みだけを浮かべていた。

「そういうもんや」は父親の口癖だった。父親は争い事を好まない人で、萌黄は一度も彼の怒る顔を見たことがなかった。穏やかな性格というより、気の弱い人だった。

光嶋一家の住むマンション自治会に乞われて会長になったものの、面倒なことばかり押しつけられて、父親は始終右往左往していた。夏の日曜日、当番はみんな遊びに出かけるための言い訳を並べて参加せず、ひとりマンション前の草取りをしていた父親の姿を思い出す。萌黄はそんな父親がじれったく、腹立たしかった。

父親はどこかの会社の研究所に勤めていたが、萌黄にはちつとも自慢のできる父親ではなかった。体格的にもひ弱な人で、海に遊びに行ったときも、父親はひとり砂浜でじっとしていた。遊園地で高いところは怖いと観覧車にも乗らなかった。

萌黄は一度父親に向かって、面倒ごとを父親ばかりに背負わせるご近所さんをなじったことがある。その時、父親は「そんなもんだ」とつぶやいて取り合わなかった。母親は活発な人だったにもかかわらず、父親の不憫な姿に憤ることもせず無視し続けた。「お父さんは言っても聞かないもの」と母親は言った。

ふたりが離婚する際でさえ、父親は何も語らなかった。何も語らないまま、すぐごと家を出て行った。今頃どこでどうしているのか萌黄はまったく知らないし、最近では思い出すこともなくなっていた。

なのに。

（なんでここでお父さんが出てくるの？）

そういうもの——。父親が口にする、なぜやりにしか聞こえない。しかし今、とても理解しにくい、理解できないことを目前にしてその言葉を聞くと、なぜかホツとした気持ちになれた。

（お母さんは理解できないことがあると、相手が間違っていると決めつけ、突っぱねる人やった。でも——、そんなもんやと思えば、ちよつとは理解できるようになるんやろか……。むんの気持ちが理解できるんやろか）

「こつちやでえ」

むんの呼ぶ声に萌黄は現実に戻された。萌黄は頭を左右に振ると、買い物かごを握り直し、レジで待つむんの元へと急いだ。

エステイマの運転席では、柳瀬が退屈そうに駐車場を出入りする車を眺めていた。運転してる最中は長距離にも疲れた顔を見せず喜々としていたのに、停まったとたんに素に戻る。じつとしてるのが苦手なのかもしれない。きっと運転中は《変身中》なのだ。萌黄はむんと顔を見合わせてくすつと笑った。

伊里江は相変わらず背もたれに身をゆだね、じつとしている。瞑想中なのか眠っているのか、閉じた目はぴくりとも動かない。

「どうもどうも、お疲れさまです」



扉を開けた柳瀬は、ふたりの手から買い物袋を受け取った。

「揣摩さんは？」

萌黄が訊ねると、

「煙草休憩ですよ。裏のほうへ歩いて行きました」

「わたし、呼んできます」

萌黄は駆け出した。

駐車場の裏手は工事現場だった。近々ビルが建つらしく巨大な鉄骨が並べてある。揣摩はその鉄骨の一本に腰かけて紫煙をくゆらせていた。

「揣摩さん」

「お、来たな風上娘」

確かに萌黄は煙を避け、風上から近寄っていた。

「お昼ご飯、買ってきましたよ」

「ありがとう。吸い終わるまで、もう二分くれたまえ」

おどけたように言っていると、揣摩は急いで残りを吸い始めた。萌黄は辺りをぐるっと見回した。工事現場に人の気配はない。戒厳令の影響だろう。

「萌黄さん」

揣摩に名前を呼ばれて萌黄はドキッとした。やはり男性とふたりつきりになると胸の動悸が高鳴ってしまう。

「君には知っておいてほしいんだが、俺はあのエリート奴を信用していない。奴の話は全部でたらめだ」



「……」

「奴には何か別の狙いがあるに違いない。俺たちを淡路島に連れて行って、どうにかするのかも」

「どうにかって？」

「そりゃあ、うん、判ないけどさ」

萌黄は揣摩の美しい横顔を見上げた。

「——奴の兄貴がとんでもない発明をして、世界が鏡に映ったみたいに裏返ったなんて、冷静に考えると荒唐無稽の極みだよ。北海道が消えたのは、きっと奴の兄貴とは無関係だ。奴の言葉に振り回される必要はない。君が銃弾を跳ね返したのだって裏があるんだと思う」

「裏、ですか」

「あの時にエリーが撃った弾には仕掛けがしてあったんだろう。そうやって君をリアルなんて存在に仕立て上げた。さらに迷彩服どもの襲撃を受けた時、奴がガスを操って敵を退治したのも巧妙なタネが隠されているんだ。奴の正体はマジシャンだと俺は見るね」

「でも、わたしにとつては見るもの触るもの、本当にすべて逆なんです。エステイマも左ハンドルに見えるし」

「うーん、その件は……置いところ」

萌黄は眉を曇らせてうつむいた。揣摩は萌黄が病気だと決めつけてるんじゃないだろうか。左右が認知できないような障害だと。

「全部ウソやとしたら、エリーさんにどんなメリットがあるんでしょう？」

「メリットはある。エリーの奴は今でも兄貴と通じてるのさ。何の関係もない北海道消失に事寄せて、外と内から世間を騒がせ、兄弟で表舞台に返り咲こうという魂胆なんだろう」

なるほど、揣摩の語るストーリーのほうが一般人には飲み込みやすいだろう。しかし萌黄は知っているのだ。自分の周囲の世界は明らかに裏返っているし、自分の身体は真正銘の銃弾を跳ね返した。あの時、全身を貫いた衝撃が今でも胸で疼うずいている。

どうにかしてそのことを証明できないだろうか。みんながバラバラな思いを抱いていたら、この先どうなるか。萌黄は爪を噛んだ。どうすれば――。

ふいに萌黄の足がふらついた。

（危ない、目めまい暈や）

しかし揺れはみるみる激しくなり、萌黄は悲鳴を上げてその場にしゃがみ込んだ。

「地震だ！」

揣摩が叫んだ。

「きゃあああ」

萌黄は頭を抱えてしゃがみ込んだ。

「うわわ」

揣摩も座っていた鉄骨が揺らぎ出したため、たまらず地面に飛び降りた。

ゴゴゴゴゴという不吉な音が空気を震わせ、ふたりの周囲を包み込んだ。建築現場に組み上げられた足場が大きくきしみ、建材などがガタガタと音を立てた。

「危ない！」

揣摩の声に振り向くと、重ね方に問題があったのだろう、鉄骨の一本が萌黄に向かって崩れ落ちようとしていた。萌黄は悲鳴を上げながら本能的に後ずさったが、それが幸いした。彼女の身体は背後にあったくぼみにはまり込んだ。背中から落ちると同時に、彼女のいたところに鉄骨が落下した。大量の砂煙が萌黄の上に降り注いだ。地震は始まった時と同様、すーっとフェイドアウトしていった。萌黄は後ろに手をついたまま、じっとしていた。揺れ戻しはやって来ず、それっきり揺れは収まった。おそらく規模としては大した地震ではなかっただろう。たまたま建築現場にいたため、ふたりは揺れを大きく感じたのだ。

ようやく落ち着きを取り戻した萌黄は、頭や身体にかぶった砂を払い落とし、ゆっくりとくぼみから這い上

がった。

落ちた鉄骨のそばでは、揣摩が寝そべったまま深呼吸を繰り返していた。

「揣摩さん」

「やあ、萌黄さんは、大丈夫だったよな？」

気安く放たれた揣摩の一言に、萌黄は微妙な色合いを感じた。

（わたしが怪我をするはずがない？）

——リアルだから？

鉄骨の下敷きになったぐらいではかすり傷も負わないだろう——彼女の耳にはそんな風に聞こえた。

（リアルなんてありえないって否定したくせに。心のどこかじゃ自分の考えに自信がないんや！）

萌黄は鼻白む思いがして、そっぽを向いた。揣摩も自分の失言に気づいたらしく、口を真一文字に結ぶと、とって付けたように砂を払いながら、

「行こう。みんなが心配してる」

と言った。

その時、萌黄のポケットの携帯が振動した。取り出すと液晶画面に『キングギドラより』と表示されていた。

「先に行ってください」

萌黄の言葉に揣摩は流し目をくれたが、判ったと手を上げてみせ、駐車場へと歩いて行った。萌黄は携帯の通

話ボタンを押した。

「なによ、この大変な時に」

画面に現れたキングギドラは三本の首を悠々と揺らめかせていた。

《ご機嫌斜めのご様子だね。お邪魔だったかい？》

口を開いたのはやはり真ん中の首だった。

「あんたまだおったんかいな。携帯オンにしてたら敵に見つかるからって電源切ったはずなのに、どうやって出てきたんよ？」

《ボクに不可能はないさ。それにもう電源の心配をする必要はないよ》

「どういうこと？」

萌黄は首を傾げた。キングギドラは翼を広げながら、《GPSとの接続回路を遮断したからさ。誰かと通話しない限り、位置を特定されることはないよ》

「……………」

萌黄は絶句した。現代の携帯電話は、法律によってGPS接続が義務付けられている。そのため電源が入っていれば自動的に電話会社のコンピュータに自分のいる場所が記録されるようになっていたのだ。

「ウソでしょ？ PAIにそんなことできるわけないやんか」

《普通のPAIならね。ボクはそういうPAI原則には

縛られない存在だから」

「……………」

萌黄は二の句が継げられないまま、キングギドラを睨み返した。ありえない。そんなことありえない。

《疑ってるね。ごらんよ》

ブウンツという音と共に、ホログラフィックウインドウが空中に浮かび上がった。GPS衛星との接続状況を示すページが表示され、『接続不能』の文字があつた。

《ね?》キングギドラは胸を張ってみせる。《これで安心して使えるよ》

「安心して言うたかて、あんたみたいなのが棲みついたら、知れたもんやないわ」

《今日はどうも虫の居所が悪いみたいだなあ。せっかく重要な情報を教えてあげようと出てきたのに》

「ふうん」

萌黄は携帯を持つ腕をだらんと伸ばし、伏し目で三ツ首の怪獣を見おろした。

《その表情はやめたほうがいいよ。かわいくないから》

「よけいなお世話ですーっ。言いたいことがあるなら、さっさと言いなさい」

キングギドラの首は、三本ともわざとらしく咳払いなどをしてみせ、

《いま地震があつたろ? それに関連する話だよ。君た

ちの進むルートから察するに、明石海峡大橋を渡るつもりらしいけど、急いだほうがいいと思うな。地震の影響で通行禁止になる可能性があるからね」

## 12

「通行禁止？ 渡れなくなるってこと？」

《そうだよ》

キングギドラは長い首をペコリと垂れて頷く。

「ホンマかいな。そんな情報をアンタどこから仕入れてきたんよ？」

《連絡橋公団のサーバを覗いたり、職員の電話のやりとりに耳を傾けたりしてさ》

「盗み聞きやんか」

萌黄は非難したが、キングギドラは、

《いずれ公表される情報だよ。気にすることないさ》

と平気な顔で言う。もつとも精巧に作られた怪獣の顔からは表情を読み取ることは難しかったが。

「どうしてわたしに教えてくれるん？」

《君の携帯に居候させてもらってるんだ。これくらいしないと罰が当たるよ》

PAIのくせに、いやに殊勝なことを言う。

「まだしばらくいるつもり？」



《それはまあ、出て行けつて言うなら、すぐにでもお暇いとまするけど》

萌黄はキングギドラの金色に輝く鱗をじっと見つめた。  
「……あなたは誰に作られたの？」

《唐突な質問だね。でもその質問には答えられないなあ。生みの親を司直の手にゆだねるわけにはいかないものね》

もつともだ。コンピュータからコンピュータへ自由に渡り歩くP A Iなど許されるものではない。作った者は重罪に問われることになる。

これまでにそんなP A Iなど表向きには存在しなかった。さまざまな理由で技術的に困難だからだ。そのひとつにメモリーの問題がある。

P A Iはひとつのプログラムだ。高度な知能を持てば持つほどプログラムコードは巨大になる。テラバイトのメモリーを持つ昨今の携帯電話でもってしても、なかなか「狭苦しい」のだ。

高い知能にこだわらなければ、むんの携帯にしたように、複数のP A Iを同居させることもできる。

ところが、極めて高度な知能を有しているかに見えるキングギドラは、すでにモジのいる自分の携帯に、すんなりやってきた。

「本当にモジを消したりしてないでしょうね？」

《しつこいなあ。疑うなら今ここに呼んであげるよ。モジくん》

するとキングギドラの声を待っていたように、画面の下から緑色の身体が現れた。

《萌黄いゝ》

「モジ！ 無事やったんやね」

久しぶりに自分のPAIの声を聞いた萌黄は、思わず小躍りした。

《まあ元気やけどねゝ、むりやりコイツの遊び相手、させられてんねん。うっとうしいわゝ》

《むりやりはひどいな。楽しそうにしてたじゃないか。さっきまでオセロのお相手をしてくれてたし》

二頭身のモジが鋭いまなざしで、実物そっくりのキングギドラを見上げる。不思議な絵だった。

二匹は明らかに同居している。モジはメモリーの七割を占有しているのに。この三ツ首怪獣はどんなプログラムで動いているんだろう？

「なあ、キングギドラさん」

《ギドラでいいよ》

「ギドラさん、どうしてあなたはわたしの携帯にやってきたの？」

その時、駐車場のほうからむんの呼ぶ声がした。なかなか戻ってこないで心配になったのだろう。

「いま行くー」

萌黄は携帯を広げたまま、歩き出した。

《ねえ萌黄さん、ボクのこととは他の人には秘密にしておいてくれるかな》

萌黄は頷いた。

《よかった。それじゃまた後で》

「うん。——モジも適当にギドラの相手をしてやってね」

モジは画面の隅から太い尻尾だけ出して、プルプルと左右に振った。バイバイと言ってるのだ。

《そうだ。最後に——》

ギドラが、携帯を閉じようとする萌黄を呼び止めた。

「なに？」

《さっきの質問。ボクがなぜ君の携帯にやってきたか。

それはね——友達が欲しかったからなんだ》

萌黄は足を止めた。

《放浪を繰り返したあげく、ようやくモジ君に出会えた。そして創造主である萌黄さんにも。ボクは今とてもうれしいんだ》

車に戻った萌黄は、明石まで急ぐよう、皆を急かした。「橋が通行止めになっちゃうかもしれない？ そりゃ大変だ、急ぎましょう」

手早く昼食を済ませると、柳瀬運転手は勢いよくエステイマのアクセルを踏んだ。

橋に関する情報源について萌黄は、携帯で信頼性のあ  
る掲示板を覗いたと言い、携帯を使って大丈夫なのかと  
いう疑問には、秘密の操作方法を見つけたと嘘をついた。  
胃袋が満ち足りて、車内に明るさが戻ったようだった。  
むんはまだ気持ちの置き所に困っているようだし、揣摩  
は萌黄に対して若干よそよそしかったが、今はそれこ  
ろではない。

エステイマは阪神高速神戸線などは利用せず、あくま  
で裏道をメインに、西へ西へとスピードを上げた。

## 〈第八章につづく〉